アルケイア―記録・情報・歴史―
第九号　二〇一五年三月　六五―九四頁
南山アーカイブズ

南山大学と戦争遺跡

南山大学人文学部人類文化学科
永井英治

Nanzan University and War-related Sites in its Campus

Department of Anthropology and Philosophy, Faculty of Humanities,
Nanzan University
NAGAI Eiji

Archeia: Documents, Information and History
No.9 March, 2015 pp.65-94
Nanzan Archives

序　学校沿革史と戦争遺跡
一　南山学園の戦争遺跡
1　南山学園の戦争遺跡
2　旧名古屋聖霊学園の戦争遺跡
3　資材の転用
小括
二　南山大学の戦争遺跡
1　高射砲陣地
2　爆弾穴
3　パンプキン爆弾
小括
むすびに

南山大学と戦争遺跡

永井英治

序　学校沿革史と戦争遺跡

本稿は、大学キャンパスに現存する、またはかつて存在していた戦争遺跡について、個別学校沿革史の成果を利用して考察するものであり、具体的には南山大学を対象とする。

近年の個別学校沿革史研究では、アジア・太平洋戦争との関わりにおいて、学徒動員、戦没学生らの基礎的データの収集、事実確認について成果が挙げられている[1]。それらは、大学史編纂の一環として、あるいは大学アーカイブズによる継続的な事業として進められ、複数の大学で成果が公刊されている。敗戦から七〇年を迎えようとする現段階においてもなお事実の確定が必要とされることは、大学とアジア・太平洋戦争との関係を明らかにする基礎的事実の確認作業が先延ばしにされてきた事実を逆に照らし出している。

一方、大学内の戦争遺跡については、大学アーカイブズおよび類似機関とは異なるところで関心が高まっているところに特徴がある[2]。それは、戦争遺跡への関心[3]が平和教育の中で深化されてきたことと無関係ではない。何より

も、戦争の記憶を直接語ることができる人々が時の経過とともに減少せざるを得ないという厳然とした事実に対し、「語り」による記憶の継承から「モノ」による記憶／記録の継承へと、方法を変えていかなければならないという事態が、戦争遺跡への関心を高めているのである。[4]

近年、大学内の戦争遺跡に積極的に向き合った議論を展開している明治大学の登戸研究所や慶應義塾大学日吉キャンパスの地下壕についても、議論の様子を知ることができるのは学内の歴史学会から発行される研究誌といくつかの単行本[5]からであり、それらに大学アーカイブズおよび類似機関の積極的関与は見出し難い。また、それらの戦争遺跡が現在のような学内の認知を得る過程では、むしろ、中等教育機関での平和教育・学習や市民運動が重要な役割を果たしてきたことが示されている。大学とその構成員による戦争遺跡の認識は、後発的であり、それは、大学における平和教育のこれまでのあり方にもつながるように思われる。[6]

大学における戦争遺跡は多様であるが、注目されやすいものとして校舎そのものが挙げられる。戦中期に校舎を収容されるか、戦災によって被害を受けた高等教育機関が、戦後、再開のために、あるいは新たな学校を設置するために、校地・校舎や資材として旧兵舎などの軍事施設を利用することは少なくなかった。[7] たとえば、愛知県内では、戦後に設置または学部が増設された旧制大学である名古屋大学と愛知大学は、ともに、旧軍施設を利用している。名古屋大学の文系学部は、名古屋城内にあった陸軍歩兵第六連隊兵舎を利用し、愛知大学は豊橋の陸軍予備士官学校兵舎を利用した。[8] 名古屋大学はその後、分散していた学部を東山キャンパスに集中させたため、現在のキャンパスにその面影はない。いっぽう、愛知大学豊橋キャンパスでは、現在も、旧制段階から校舎として利用された兵舎の一部が利用されている。

このような事例は、該当する個別学校沿革史では既に指摘されていることである。[9] また、羽田貴史は高等教育機

関の配置の歴史を検討する中で、総力戦体制下での人口分散を目的とする学校分散計画の延長線上に戦後の高等教育機関の地方分散政策を位置付け、その手段として既に軍用施設の転換が意図されたことを指摘している。[10] 一方、都市史研究では、戦後の軍都から地方都市への転換の中で、軍用地から学校など文教施設への転換があったことが指摘されている。[11] ただし、転換された軍用地の量的な評価については、ほぼ対立する指摘がなされている。[12] 限定的に捉える論者は、戦後においても軍用地が拡大した地域があること、軍用地が特定の地域（沖縄）に集中したことを重視しており、本稿はこの指摘を支持した上で、軍事施設から文教施設への転換事例があったことの意義を考えたい。また、個々の事例においては、戦後においてすらGHQ/SCAPに校舎を接収された教育機関もあったこと[13]を考えたとき、当事者からすれば、軍用地が大学に転換された他校の事例を以て自校の被った経験を免罪することはできないであろう。いくつかの条件が重なって、「幸運」にも軍用地・軍事施設から転換した校地・校舎を獲得できた学校は、全く異なる事態を経験した他校の存在を踏まえ、自分たちの学校の校地・校舎がどのような由来を持つのか認識することが求められよう。[14] 本稿では、軍事施設から学校への転換を量の問題として捉えるのではなく、戦後に設置／復興された教育機関の中にかつての軍事施設からの転換があったという事実認識を出発点とする。そして、それを「幸運」な偶然と捉えるのではなく、（大学設置基準に最低条件が規定された）一定の校地・校舎を必要とする学校であるから一定の敷地を持っていた軍事施設が候補とされたこと、さらに、その背景には国による文教施設への転換方針が存在した[15]ことを踏まえ、それらの結果として、学校であるがゆえに戦争遺跡が残されているものと理解する。[16] ここに、大学史を参照して戦争遺跡を考えることの有効性の根拠がある。[17] また、既に失われてしまった戦争遺跡であっても、個別学校沿革地の中で明らかにされる校地・校舎の変遷が、それらを検討対象とする基礎的事実を提供するものとなる。そして、やや願望が入り混じるが、戦争遺跡に係る経緯が、自分の所属する

学校の歴史の一齣であることによって、失われた戦争遺跡への関心を持つことが可能になると考えたい。現在の自分とは切断された歴史として受け取るのではなく、リアリティーをもった共感への契機として、自分が在籍する学校という日常から延長していく方法である。この方法では連続性は認識できても断絶面を捉えることが難しいという限界はあるが、本稿は、そのような認識の次元に至る前段階を想定して、自校史からの出発を試みるものである。

一　南山学園の戦争遺跡

南山大学を経営する学校法人南山学園は、一九三二年、（旧制）南山中学校を経営する財団法人南山中学校として始まった。一九四六年、南山外国語専門学校を設置する際に財団法人南山学園に名称変更し、一九五一年、学校人南山学園に組織変更した。財団法人南山中学校設立の段階では、経営母体はカトリック名古屋教区であったが、一九四八年、神言修道会（以下、神言会と表記）が経営母体となった。神言会は一八七五年、ドイツ出身のアーノルド・ヤンセンがドイツの文化政策の難を避けて、オランダ・シュタイルを本拠に設立した布教を主たる活動とする修道会で、日本には一九〇七年に訪れた。

一九九九年、学校法人南山学園は同じくヤンセンが設立した聖霊俸持布教修道女会が一九四八年に設置した学校法人（設置時は財団法人）名古屋聖霊学園と合併した。以後、南山学園の歴史を論じるときには、名古屋聖霊学園の歴史も対象とするようになった。これは、単に法人合併したことが理由であるだけではなく、設立母体の神言会と聖霊会は、協力して活動する場面が少なくなく、学校運営のさまざまな場面で両者は協同した経緯があることにもよる。論述の便宜のため、節を分けるが、ここでは旧来の南山学園の戦争遺跡と旧名古屋聖霊学園（現・南山学

園）の戦争遺跡について紹介と解説を行ないたい。[18]

1　南山学園の戦争遺跡

（旧制）南山中学校の校舎としてはじめに建設されたのが、現在、名古屋市昭和区五軒家町にあるライネルス館である。鉄筋コンクリート造三階建て、築八〇年を超えるが南山アーカイブズとして使用される現役の建物であり、登録有形文化財となっている。

この建物は一九三二年から（旧制）南山中学校の校舎として使用され、一九四六年からは開設された南山外国語専門学校（一九四七年に名古屋外国語専門学校と改称）の校舎に転用され、さらに、一九四九年からは新制南山大学の校舎として利用され、一九六四年の大学移転まで大学校舎として利用された。その後、新制南山高等学校・中学校から分化・独立する南山国際高等学校・中学校等の教室としても利用された。

満州事変の翌年から開校した（旧制）南山中学校は、学校としての存在をほぼ戦中期の中で経過した。現在、建物に名を残すヨゼフ・ライネルスは財団法人南山中学校理事長として、初代校長として、この学校の運営にあたった。神言会が目的としたキリスト教の布教を学校教育の中で行なうことはもとよりできず、配属将校による教連、宮城遥拝、熱田神宮参拝などが学校行事の中に組み込まれていた。本稿の直接の主題からは外れるが、この時期の南山中学校の様相を瞥見したい。設置から五年間刊行され、戦後の複製によって現在もそのままの内容がわかる校誌『南山』には、教員や配属将校の文章、中学生の文章と、学校の記録が掲載されている。それらには、設置に関わった人たちが本来意図したであろう教育理念は当然であるが周到に配慮され、容易に窺えない。学外の人たちからにもカトリック教区が設置母体の学校であることは知られており、むしろ、国策に反した教育が行なわれている

のではないかという疑問が中学生に投げかけられ、当の中学生が真剣にそれを否定する様子を生徒に仮託して書いた学校案内が痛ましい。

南山の教育の特色は、むしろ、短命に終わった南山小学校によく現れていたようである。南山小学校は、公立小学校では虚弱児童とされてしまう児童を普通に受け入れ、大正自由主義教育の影響を受けた教員によって、特色ある教育が実施されていた。手作りの教材はもとより、そもそも授業らしい授業はなかったとさえ回想される。しかし、小学校が国民学校に転換すると、私立学校は国民学校にふさわしくないとされ、南山小学校は廃止された。

中学校も勤労動員によって学校から中学生たちの姿が消え、教員の中にも徴兵される者がいた。もはや学校が学校として機能しない中、南山中学校は校舎を軍に貸すこととなった。この貸借契約書[19]によって、南山外国語専門学校の設置申請では、校舎の整備費用の一部に校舎の損耗に対する補償が充当されていた。

校舎の屋上には機銃が据えつけられ、校舎の外壁は迷彩色に塗られた。この迷彩色の校舎を映した写真が一枚だけ残っている[20]。ただし、もとは活版印刷―したがって新聞に掲載された写真ではなかったかと思われる荒い画面の写真である。撮影時期も含め、詳しい情報は一切伝えられていない。そもそも、軍の施設とされている状態の建築物を撮影できたことが不思議である。迷彩色は、敗戦後比較的早く洗い落としたとされるが、当該写真は敗戦後の撮影であったか否か、可能性の次元でなければ論じる材料はない。

これまで、戦中期の南山中学校については、戦争によっていかに被害を受けたかという視点で語られてきた。勤労動員先の工場への空襲によって中学生が死亡したこと、徴兵された教員が戦死したこと、そして前述の校舎の惨状である。迷彩色の外壁などおよそ教育の場に相応しくないと思われるが、それだけでなく、返還され立ち入ることができるようになった校舎に戻った南山関係者は校舎内部の荒れようにも驚き、補償金だけでは元通りに修復す

ることはできなかったとされる。これらの被害の記憶と、中学生が使用したゲートルや模擬銃剣などのモノが、南山中学校とその生徒・教員ら経験した戦争を伝える。モノを除けば、それらは現在に形を残していない。校舎がかつて軍の施設となった事実は、いくつかの記録を除き言説の次元に存在する…と思われた。

しかし、南山中学校の校舎は今も使用される建物である。外観にも内装にも、かつての「経験」を伝える痕跡はない。しかし、その建物は間違いなく軍の施設として使用されたことがある。これは戦争遺跡ではないか。

2　旧名古屋聖霊学園の戦争遺跡

後に南山大学の教員となる直井豊は、占領軍に接収されている施設を利用しての教育事業の可能性を神言会に示唆した[21]。南山学園の経営母体として既に教育事業を展開していた神言会は、これに応じることはなかったが、聖霊会が反応を示した。秋田[22]で聖霊学園の設置母体として女子教育を行なっていた聖霊会は、名古屋では医療―具体的には病院運営を行なっていたが、教育事業は展開していなかった。

名古屋市中区三の丸の陸軍野砲兵第三聯隊の旧兵舎を占領軍から提供され、初めは女性向けの各種学校の体裁で、続けて女子中等教育を始めたのである。土地・建物の双方に所有権を持たない学校運営は基盤が薄弱であったが、占領軍から借りていることが強みであり、弱みでもあった。

朝鮮戦争が起こると、占領軍である米軍は施設の見直しを図り、聖霊会に貸していた兵舎の返還を求めてきた。占領軍から指示を受けた業者が授業中の教室内に立ち入り、測量を始めるなど、有無を言わさぬ返還の圧力に聖霊会の校長／理事長はマッカーサーへの直談判に及ぼうと行動した。マッカーサーは不在であったが、提出した嘆願書に対し、貸与を継続する書類が届き、学校存亡の危機は去った。これを契機に、聖霊学園は、占領終結後、国有

財産に帰す借用地・建物の払い下げを求めていった。

木造兵舎は学校運営を展開していく上で支障があるため、この建物は取り壊された。さらに、立地からくる騒音と拡大しようのない校地、短期大学設置の要望に対応するため、名古屋聖霊高等学校・中学校は瀬戸に移転した。現在、かつてそこに学校があったことを示す手がかりは跡地には何もない。

以上の略史から明らかなように、名古屋聖霊高等学校・中学校は旧軍事施設を転用して教育が始まったのであるが、現在、その施設は失われており、校地ですらない。旧兵舎が現在も残されていれば、戦争遺跡と認識することは容易である。戦争遺跡と認識されなかった段階の取り壊しであるから、意図的な遺跡破壊ではないが、失われた戦争遺跡と理解することはできよう。あるいは、学校沿革史の中で掘り起こされた戦争遺跡である。

3　資材の転用

パッヘの総合学園構想は、中等教育も対象とした。旧制南山中学校は、学制改革により、一九四六年に（新制）南山中学校、一九四八年に（新制）南山高等学校に転換した。公立の（新制）中学校・高等学校と同じ年度に設置されたのである。そして、女子を対象として、一九四八年に南山中学校（女子部）、一九五一年に南山高等学校（女子部）が設置された。これにより、それ以前の男子対象の中学校・高等学校は（男子部）と括弧書きされ、それぞれ、男子部・女子部と呼ばれた。

制度の上ではひとつの中学校が男子部と女子部から構成されることになり、高等学校も同様であったが、実態としては中学校・高等学校の男子部がひとつの学校のように運営され、建物も男子部・女子部に分けられた。後発の女子部は校舎等の施設の確保に困難し、愛知県岡崎の第三岡崎航空隊兵員休憩所を資材として再利用して、一部の

建物を建てた。女子部ははじめ、南山大学が立地する一角の北西部分にあったが、一九五三年（中学校）一九五六年（男子部）、歩いて数分もない現在の場所（隼人町）に移転し、新しい校舎を持った。残された校舎は、大学の北校舎として利用された。

資材の再利用に過ぎない旧女子部校舎・大学校舎は、戦争遺跡であろうか。南山大学社会倫理研究所と南山大学史料室（現・南山アーカイブズ）が共同した第三代学長J・ヒルシュマイヤーの著作集編集作業の過程で、南山学園職員を対象とした講演を録音したテープが確認された。一九七七年八月に行なわれたこの講演の中で、ヒルシュマイヤーは、大学北校舎の由来について話している。したがって、大学北校舎が旧軍事施設を資材として再利用して建てられたという事実は認識され、一九七〇年代後半まで共有されていたと言える。大学北校舎は戦争遺跡そのものではないが、旧軍事施設の資材としての再利用という戦後の状況を伝えたことは間違いない。

資材の（再）利用という点では、現在も南山大学図書館の蔵書のうちに、旧名古屋陸軍幼年学校蔵書が含まれる。敗戦後、愛知県西尾の岩瀬文庫に移管されていた旧名古屋陸軍幼年学校蔵書が名古屋外国語専門学校にもたらされ、それらが南山大学図書館蔵書として継承されたのである。

旧陸軍幼年学校蔵書がまとまって残っているところとしては、熊本県立図書館の蔵書となっている熊本陸軍幼年学校のそれが知られている。南山大学の蔵書は、岩瀬文庫から運び出す際、児童書に類する本は残されることになり、それらは西尾市立図書館の児童書として特別扱いされることなく現在も図書館資料として利用されている。南山大学の場合も同様で、何が旧陸軍幼年学校蔵書であるかを探し出すことは、データ上では不可能である。つまり、南山大学図書館に所蔵される旧名古屋陸軍幼年学校蔵書は、現在も図書館資料として利用されていて、それが特別な経緯を持っているという扱いは受けていない。やや古そうな本を書架から取り出して、ページを繰ると、名古屋

陸軍幼年学校の蔵書印（スタンプ印）が捺されていて、それに気が付かなければわからない状態である。しかし、それは、旧名古屋陸軍幼年学校蔵書が現役の図書館資料として利用されているからであり、戦争遺跡に含まれる遺物が、二次的な性格となる戦争遺物として扱われるのでなく[23]、本来の用途に即して利用されているのである。これは、旧制南山中学校が軍事施設に転用され、さらに学校施設としてのあり方を回復した過程と同様である。ただし、旧名古屋陸軍幼年学校蔵書には蔵書印という刻印が文字通り捺されているので、軍事施設で利用された痕跡は確実に残されているのである。本来の用途に即して利用されているから、それらを殊更に戦争遺物と理解する必要はないということはできない。日常的に使用されていたモノが、戦争という状況の中で特殊な二次的役割を与えられてしまうこと、それが戦争である。このことが確認できれば、軍事目的に収斂する文脈の中で用いられていたことが明らかなモノは、戦争遺跡／遺物と理解されるのである。

小括

以上、本章では、南山学園の戦争遺跡と認識することが可能と思われる施設について紹介した。ここで紹介した事例は、これまでにまとめられた南山学園史、名古屋聖霊学園史、南山大学史の中で、存在自体は指摘されている。本章では、失われたものを含めて、それらに戦争遺跡としての性格を読み込んだ。戦争遺跡と認識することで、戦争について知る／考えることができる対象が学校に存在する／したことが認識可能となる。それは、戦争について考えることと、個別学校沿革史の双方を深化させ、個別学校沿革史から戦争を考える方法を提供する。とくに、失われた戦争遺跡については、個別学校沿革史の成果が重要となる。これは、自校史教育の重要な論点を再認識させるものとなる。章を改め、南山大学名古屋キャンパスの戦争遺跡を取り上げて検討した後、この点に立ち返りたい。

二　南山大学の戦争遺跡

1　高射砲陣地

南山大学は、一九六四年に昭和区五軒家町から現在の名古屋キャンパス（昭和区山里町）に移転した。大学設置から一五年後のことである。徒歩にして約三〇分の距離であり、初代学長パッヘがこの地に南山大学を移転させる構想をもっていたことは知られていたので、大学関係者にとってまったく知らない場所ではなかった。ただし、パッヘの構想はあくまでも構想であり、実際、南山大学の移転が決定するまでには南山高等学校・中学校の移転という選択肢もあった。

移転した南山大学のキャンパスは東山丘陵地帯にあり、大学校地はさらのその中でも小高い丘陵の先端に位置した。現在でも校舎の高層階からは名古屋の市街地が一望できる。このような地形条件と、かつては名古屋の郊外であったという地理的条件により、軍都・名古屋を囲む円形状に配置された高射砲が校地となる一角に設置されていた。

この高射砲陣地跡は校地の西部に設定された運動場予定地にあったが、コンクリートの砲台設置跡はキャンパス新設工事の過程ですべて取り壊され、運動場の下に瓦礫とともに埋設されたとされている。運動部の学生の中には、運動場の水はけのよさを称賛する者がいるが、それが瓦礫や高射砲陣地のなれの果てによるかもしれないことは想像されていない。現在では、キャンパス新設工事に関わった教職員は退職してしまっているが、運動場となった場所に高射砲陣地があったことは『南山大学五十年史』[24]で指摘されており、同書の当該部分の執筆者など同時代の人々にはよく知られた事実であったらしい。

これに対して、南山大学名古屋キャンパスの東南角の東隣（現在はマンションが建てられている）にも高射砲陣地があったことはあまり知られていない。校地の外であるため、積極的関心が持たれなかったということも考えられるが、一九五三年、南山学園が将来の大学移転を視野に入れた施設整備のために行なった募金活動の際に作られた『募金趣意書』には、大学の移転計画図が掲載されており、それによれば、もうひとつの高射砲陣地跡も大学校地に含まれていた[25]。一九四七年の米軍撮影による航空写真など、国土地理院の Web ページ[26]で閲覧可能な航空写真からは、もうひとつの高射砲陣地が確認できる[27]。

したがって、南山大学名古屋キャンパスは、運動場西端と校地東南角東隣の二つの高射砲陣地跡に挟まれていたことがわかる。これは、南山大学名古屋キャンパスが広大な敷地を持っているからではなく、二つの高射砲陣地がかなり近接していたことを示す。

名古屋市見晴台遺跡（名古屋市南区）に現在も確認できる高射砲陣地の考古学的調査を精力的に進め、その成果を発信している伊藤淳史は、名古屋を取り囲む高射砲陣地の全体像についても明らかにしている[28]。伊藤によれば、南山大学運動場西端の高射砲陣地は楽園陣地の名称で一九四四年九月以降の設置、もうひとつの校地東南角東隣のものは川名山陣地、一九四二年秋に構築され、コンクリート製の砲座は一九四三年一二月までに完成したが、一九四五年四月末に廃止された[29]。ここからみる限り、二つの高射砲陣地は一九四四年九月以降敗戦まで同時に機能していたことになる。

二つの高射砲陣地が近接して機能していたのは、米軍爆撃機の軍都・名古屋への侵入経路との関連が指摘されている。三河湾から北上し、西に方向を変えた爆撃機は、名古屋に侵入すると、名古屋市北部と南部にそれぞれ分岐して向かう。二つの高射砲陣地は、この侵入→分岐のポイントに位置していたことが指摘されている。高射砲によ

る防衛機能はかなり低かったのであるが、それでも、これらの高射砲陣地は名古屋の防空において重要な位置にあったことになる。前述のように、アジア太平洋戦争末期には（旧制）南山中学校生徒は勤労動員により、学校で教育を受けられる状態ではなかった。それだけではなく、動員先の工場での空襲により死亡した生徒さえいた。このような事態が起こる理由として、名古屋が軍都であり、戦闘機生産に占める位置付けが高かったことは理解されるべきであろう。二つの高射砲陣地は、空襲により多大な被害を受けたことの認識だけではなく、それらの空襲がアジア・太平洋戦争の歴史の中でどのように理解されるかという認識に進む契機となり得るのである。

以上から、この二つの高射砲陣地は、現キャンパス内にある一方のみを取り上げるのでは不十分である。けっして広大ではないキャンパスが二つの高射砲陣地跡に挟まれていた場所であったことの理解が重要なのである。地域の中で大学史を考えるという視点を重視すれば、これは大学史の射程にある。

2　爆弾穴

米軍撮影の航空写真を見ると、南山大学名古屋キャンパスの運動場西端にあった楽園陣地から東北の方向に伸びた直線状に、爆撃の被弾によってできた穴が並んでいることがわかる。これらの爆弾穴は、のちにキャンパスとなるところ以外にも確認される。前註に記した伊藤淳史の報告も、そのひとつである。

これらの爆弾穴は、高射砲陣地を狙った爆撃によるものと、『南山大学五十年史』では理解されているが、実際に楽園陣地で軍務に就いていた人々へのインタビューを踏まえた伊藤は、高射砲陣地の存在と爆弾穴との関係について慎重な姿勢を見せている。それは、高射砲陣地を直接狙った爆撃はなかったという証言があるためである。

しかし、楽園陣地からほぼ一直線に並ぶ爆弾穴は、両者をまったく無関係とみることをためらわせる。一九四七

年段階の航空写真からわかることは、それらの爆弾穴は、高射砲陣地跡から東に並んでおり、同じような状況を西には確認できない。[30] 仮に、爆撃機が高射砲陣地を狙ったとして、それは往路ではなく復路でのこととみなされる。そして、少なくとも私よりこのような問題に知識を持つ同僚の理解では、高射砲陣地を認識してから爆撃・着弾までの時間差により、狙いを外してしまった結果と推定される。

経験者の証言は、高射砲陣地が直接被弾しなかったことを踏まえてなされるものであれば、それを狙って大きく外した爆撃があったこととは矛盾しないように思われる。高射砲陣地と爆弾穴の関係はこれ以上の議論は困難であるが、少なくとも、南山大学名古屋キャンパスとなる地は米軍爆撃機の航路に位置する、軍都・名古屋の防空上の重要な場所であったことは否定されない。

現在の運動場西端に位置していた高射砲陣地跡、キャンパス内にあった爆弾穴は、南山大学名古屋キャンパスの新築によって基本的には消滅した。戦争遺跡という認識がない一九六〇年代初頭のことであるから、現在の地平からそれらの行為を論評することはできない。ただし、一点だけ注意を喚起しておきたい。それは、南山大学名古屋キャンパスの総合計画を立てたのは、建築史において著名なアントニン・レーモンドであるという事実に関わる。

レーモンドは、アジア・太平洋戦争の時期、日本を離れ、アメリカに住んでいた。そこでレーモンドは、効果的な焼夷弾を開発するため、日本家屋の再現を米軍から求められ、協力した。戦後、来日したレーモンドは自らが行なった行為を強く悔いたことを自伝の中に書いている。[31] そのレーモンドは、戦後一五年以上を経て、大学建設予定地になお残る戦争の跡をどのように感じたのであろうか。建設候補地にレーモンドが考える建築五原則にしたがって諸施設を配置したとき、高射砲陣地跡や爆弾穴はほとんど失われた。忌まわしい戦争の傷跡はできるだけ失くしてしまうことが適切と考えられたのか、単純な地形のイレギュラーとしてほとんど意識にも上らなかったのか。レ

ーモンドの後悔が強いものであったならば、なおのこと、南山大学建設予定地に残された戦争の傷跡が意識されなかったのかと思われてならない。

名古屋キャンパス建設後、ひとつの爆弾穴が残ったことは、知られていた。校舎などの施設から離れていて、手つかずの状態であったキャンパス北東角付近に、雨水がたまって池になった、すり鉢状にくぼんだ爆弾穴があった。『南山大学五十年史』では執筆者が専門の生物学的関心から水棲昆虫などについて言及している。池となった爆弾穴の様子は、大学を写した航空写真にも確認できる。[32] しかし、この爆弾穴は、学生の課外活動のための弓道練習場設置によって失われた。以上から、現在では、南山大学名古屋キャンパスにあった戦争遺跡は、すべて失われてしまったことになる。それでも、南山大学の歴史を媒介とすることで、かつてキャンパス内に戦争遺跡があったことは認識可能である。

南山学園は、南山大学初代学長パッヘの構想をもとに、現名古屋キャンパスにあたる土地の購入に努めた。その結果、南山学園の土地となった場所は、南山大学移転が決定するまで造成は行なわれてこなかった。このことが、南山大学新設まで、高射砲陣地跡や爆弾穴をいわば放置という形で残す結果になった。一程度の面積の土地を必要とする大学キャンパス設置の可能性があったからこそ、戦争遺跡が意図しないまま残されてきたのである。ここにも、学校という施設に求められる条件が、戦争遺跡を残した事例を確認できる。さらに、坂井信三が指摘したように、これらの地域に住宅建設のための区画整理が計画されながら中止となりそのままの状態になっていた[33]ことも影響したことであろう。区画された土地が多少とも利用されていれば、高射砲陣地跡や爆弾穴は生活のために取り壊されるものもあったと考えられる。いくつかの条件が、これらの戦争遺跡を南山大学新設まで残すために働いたと見られるのである。

図1　南山大学新設工事プロットプラン（部分）　南山大学施設課所蔵

完全な形をとどめているわけではないが、爆弾穴の一部と思われる地形が一箇所だけ残っている。

米軍撮影の航空写真には、南山大学キャンパスとなる場所にクレーター状の爆弾穴を確認できる。それらは前述のように、高射砲陣地跡から東北の方向に、若干の振幅をともないながらほぼ直線状にならんでいる。伊藤淳史はこの航空写真に南山大学校舎を重ね合わせ、ほとんどが校舎の下になって失われていることを図示した[34]。クレーター状の爆弾穴は穴の縁が盛り上がっていたためか、白く写り、その中のくぼみが黒く写る。しかし、前述のひとつだけ残っていたことが確かな爆弾穴は、そのような特徴が明瞭には読み取れない。ただし、爆弾穴かと見られる円弧の一部が黒く見える。

南山大学新設のプロットプラン[35]を見ると、米軍撮影の航空写真に見えるすべてのクレーター状の爆弾穴は確認できないが、校舎が建つ予定の区画の下に円形のくぼみを確認できる（図1）。そして、現H棟の北は、周囲からやや盛り上がった地形が西から東に延びており、現H棟の東端付

近で、半円状にえぐられたような形で盛り上がった地形が終わる。えぐられたような跡はかなり鋭角になって、円に沿うように曲がっている。現H棟の東に接続してE棟が建てられて以後も、この地形はほぼそのまま現在に至っている（写真1・2）。

レーモンドは、彼の建築五原則を南山大学新設の際にも遵守し、そのひとつである「自然に」naturalという原則を維持して、地形をできるだけ活かした。また、伐採しなくてもよい樹木は極力残した。現H棟の北側には自動車の通

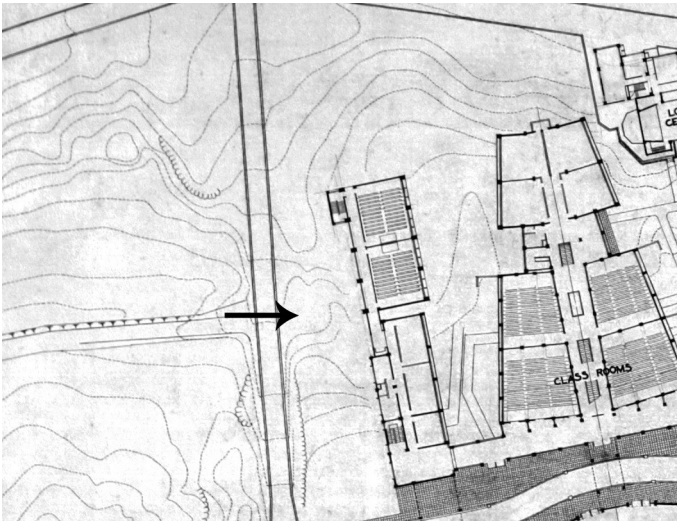

図2　1975年南山大学増設工事プロットプラン（部分）
南山アーカイブズ所蔵

写真1　東から見た現状

写真2　南から見た現状

行を想定しない通路が設けられたが、校舎とその通路の間の盛り上がった部分はそのまま残された。半円状にえぐれた部分のすぐ東に重機や資材を運ぶための道が作られたが、掘削し伐採する必要のない部分はそのまま残されたのである。一九七五年段階でもこの形状は残されていた（図2）。したがって、このえぐられたような部分は、南山大学新設時から現在までほぼそのままであろうと思われる[36]。

プロットプランの下図に用いられた測量図からは、このえぐられたような部分の底面の様子はわからないが、現状では、わずかに沈み込んでいることが確認できる。米軍撮影の航空写真でもクレーター状の爆弾穴が、この付近に集中している。高射砲陣地との関係が考えられるのであれば、その理由は明らかである。

伊藤淳史[37]が発掘し報告した、南山大学東南角の東隣に位置した川名山陣地から北北東に伸びる直線状に位置する爆弾穴のひとつは、斜面であったため、楕円上にえぐれている。米軍撮影の航空写真を見るかぎり、爆弾穴の大きさに極端な差異はないように思われるが、斜面の場合、楕円上の穴ができることがあったのではなかろうか。とすれば、測量図に見る限り、他の爆弾穴より問題の地形がやや大きくなっていることは了解される。

半円状にえぐれたこの地形は、現在の南山大学名古屋キャンパスに唯一残った爆弾穴ではないか。とすれば、これは南山大学名古屋キャンパスの戦争遺跡である。

3　パンプキン爆弾

米軍が原爆の投下訓練として行なった通称パンプキン爆弾の投下については、全国レベルでその概要が明らかにされている[38]。パンプキン爆弾とは、長崎に投下されたプルトニウム原子爆弾（通称ファットマン）に通常火薬を詰めたもので、形状からパンプキン爆弾と呼ばれた。広島に落とされたウラン原子爆弾（通称リトルボーイ）と異な

り、作動に不安があったため投下訓練が行なわれたとされる。

日本列島各地に投下されたパンプキン爆弾は、アジア太平洋戦争末期の政治過程を理解する上で重要な歴史的事実であるが、歴史叙述にこれを取り込む作業は未だ途上にある。むしろ市民による事実の掘り起こし作業が成果を挙げているが、自治体史への反映は十分ではない場合がある。[39] 名古屋に落とされたパンプキン爆弾については、投下地点、投下された日付などの基礎的事実が明らかにされており、市民による調査報告もまとめられている。

名古屋に落とされたパンプキン爆弾の投下地点は、南山大学から歩いて数分のところをほぼ南北に通る山手通りであることが明らかにされているが、南山大学でもこの事実を知る人は少なかった。私自身が不明を恥じなければならないが、今後はこの重要な事実の認識を通して、アジア太平洋戦争についての理解を深化させることが課題となる。ここで、重要な事実として、投下地点について確認しておきたい。

伊藤淳史は、米軍撮影の航空写真に基づき、近年、南山大学が山手通りに接する門として設置した山手通門を出て、横断歩道を渡ったところとしている。これに対して、この模擬原爆の被害を受けた人からの証言などにより、南山大学からは南東に位置する八事日赤交差点の北東が投下地点とされてきた。伊藤が論拠とした米軍撮影の航空写真には、八事日赤交差点の北東角に窪地らしき円が確認される。また、この爆弾穴は戦後そのまま放置され、一九七三年段階でゴミ捨て場となっていた様子を示す写真が公開されている。一九六〇年代の国土地理院による航空写真[40]では、交差点北東角は造成などが行なわれておらず、わずかに円形らしきものが認められる。一方の、山手通門の向かいには小円形は確認されない。以上から、パンプキン爆弾の投下地点は、南山大学の南東、八事日赤交差点の北東角であったことが確認されよう。投下の日時は、一九四五年七月二六日午前九時十四分、五名の死亡者がいた。この投下は、投下訓練の第一目標でも第二目標でもない、臨機の対象であった。爆撃についての観測は報

告されていない。

地下鉄名城線の八事日赤駅を利用して通学・通勤する南山大学関係者にとっては、八事日赤交差点は通勤・通学の経路に位置する。南山大学にとって、パンプキン爆弾の投下地点はほぼ日常の中にあるといってよい。しかし、そのことはほとんど意識されない。国際性が重視される今日の大学であるが、地域の中にあることは無視できない。その一端として大学が立地する地域の歴史を理解することは、地域とともにある大学の課題ではなかろうか。

南山大学が五軒家町に創設されると、施設を充実させる一環として、講堂が建設された。現在は南山学園講堂となっているこの建物の北側入り口を入ると、永井隆の「平和を」という書を刻んだ石板を見ることができる。永井隆の原子爆弾に対する理解には議論があり、ここではそれを目的としないが、南山大学がカトリック信者である永井隆の書を大学の建物に取り付けていることは不自然ではない。かつての南山大学は「平和」というキーワードについて強い意識を持っていたと言えよう。そして南山学園全体のモットーとされる「人間の尊厳のために」は、第七代南山学園理事長のアルベルト・ボルトが敗戦後の焼け跡の中で得た言葉であった[41]。

小括

南山大学建設予定地にあった高射砲陣地跡といくつかの爆弾穴は、ほとんどがキャンパス新設工事の過程で失われ、唯一残っていたと考えられていた池状になっていた爆弾穴も、その後、失われた。これらの戦争遺跡は、軍都・名古屋の防空にとって重要な地であったというキャンパスの立地条件を物語るものであり、大学の歴史をアジア・太平洋戦争の中で理解するとともに地域史の視点から理解する上で重要な意味を持つ。

さらに、失われてしまった爆弾穴が部分的にせよ、現在も残っていることが推定された。これは南山大学に残る

戦争遺跡として位置付けられる可能性を持つ。

この爆弾穴を含み、高射砲陣地跡・爆弾穴がキャンパス新設時まで残っていたことは、大学を設置できるだけの広さの土地がほぼそのままで残っていたことによる。積極的な働きかけではないが、大学建設候補地であったことが、戦争遺跡を残していたのである。[42]

学校の戦争遺跡は、偶然、そこにあったというものではなく、学校が求める条件が作用していたのである。学校が学校であるがゆえに歩んだ歴史を、学校の戦争遺跡は体現しているのである。

むすびに

本稿の論点は、第一に、戦争遺跡という認識が生まれる以前に失われてしまった「戦争遺跡」に対して戦争遺跡と認識することの意義を問うことである。遺跡としては失われてしまっていても、記録等によってアプローチすることができるものは、戦争遺跡と理解してよいのではないか。戦争遺跡という認識を持ち込むことによって、個別学校沿革史の新たな展開が期待されるという理解の上に、本稿では個別学校沿革史に失われた戦争遺跡を組み込むことを提案した。

それは、（過去の）戦争について想像力[43]を働かせた認識ができない人々に対して、自身の日常の中に残された断片から戦争について考える契機を提供することを意図するものである。記憶からモノへ戦争を考えるための契機が移行せざるを得ない中、自らは語ることのないモノから情報を引き出すためには、接する側にも読み取ろうとする努力が求められよう。その努力に踏み出す契機として、在籍する学校の戦争遺跡が身近な存在としてあり、そこか

ら、その学校が所在する地域、その地域がアジア・太平洋戦争という時間と空間の中でどのような位置付けを持っていたか、あるいはどのように位置付けられるべきか、思考の枠組みが広がっていくことを期待したいのである。

また、そのような思考の広がりは自校史教育の目的としても理解される。戦争という大きな歴史に、自校史がつながっているという認識は、主体的には関係しない、第三者的立場からの断片的知識の集積に過ぎないという、歴史への消極的な姿勢を自省する契機となることが期待される。

これまでも、個別学校沿革史において、学校と戦争との関わりが語られてきた。事実の確定とともに、それらは今後も継続される課題である。その時、学校という場であるがゆえに戦後においてすら戦争への関わり（戦争遺跡の転用）を持ってしまったことの認識を媒介とし、自己の立ち位置から戦争を考える機会とすること、これが本稿の第二の論点である。

なお、記憶／語りをモノ化する装置として記念碑がある。本稿ではいくつかの場面でも示唆にとどめたように、戦争の記憶を継承する装置となる記念碑についてはほとんど留保した。個別学校沿革史の中で戦争を考える契機としては、必ずしも記念碑という媒介が必要とされるわけではない。しかし、社会に向けての発信[44]を考えたとき、現在は失われてしまった戦争遺跡を伝える方法として記念碑という選択肢は可能である。しかし、戦争遺跡には「負の遺産」としての性格があり、戦争遺跡について語る記念碑には情緒的反応が向けられる可能性があり、それが平和への志向を妨げる事態となるのは問題である。記念碑として具体化した存在はいかにあるべきか、どのような役割を果たし得るのか、今後の課題としたい。

註

（1）『大谷大学百年史』資料編別冊 戦時体験集―「勤労動員」「学徒出陣」の記録―、二〇〇四年、大谷大学。『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』第一巻・第二巻、二〇〇六年、京都大学大学文書館。白井厚編『アジア太平洋戦争における慶應義塾大学関係戦没者名簿』（慶應義塾福澤研究センター資料（11）、二〇〇七年、慶應義塾福澤研究センター。老川慶喜・前田和男編著『ミッション・スクールと戦争―立教学院のジレンマ』、二〇〇八年、東信堂。『戦争と明治大学―明治大学の学徒出陣・学徒勤労動員』二〇一〇年、明治大学史資料センター。

（2）二〇〇五年に刊行された菊池実『近代日本の戦争遺跡―戦跡考古学の調査と研究』（青木書店）では、大学キャンパス内に所在する戦争遺跡についても事例として挙げられているが、大学史また大学での教育との関わりには触れられていない。戦争遺跡を調査・研究する考古学研究者の眼に、大学史関係者や大学自体の取り組みが認識されないほど、消極的な関与?であったものと推測される。

（3）戦争遺跡についての研究と保存運動の現況においては、戦争遺跡の掘り起しという作業があり、戦争遺跡への関心の高まりの背景には近代遺跡が遺跡として行政に認識されたという転換が影響している。本稿は、遺跡保存における行政の役割を否定するものではないが、行政の認識を起点とする発想には距離を置きたい。文化施設が国民国家の文化的統合装置としての機能を持たされることは否定できないが、重要なことは、それを市民社会の文化的基盤、市民的公共性の拠り所として読み直す指向である。この点を見失ってしまうと、文化財に指定されたものだけが文化財であるという、倒錯した議論の轍を踏むことになる。

（4）「語り」から「モノ」へ「記憶」の媒介が変化していかざるを得ないことは、金子淳「戦争資料のリアリティ―モノを媒介とした戦争遺跡の継承をめぐって」『岩波講座 アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』、二〇〇六年、岩波書店、が、博物館における展示の問題と関係させながら危機意識を持って指摘している。また、外池智「戦争体験「語り」の継承プログラムに関する研究―広島、長崎の取り組みを事例として―」（『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第三五号、二〇一三年五月、秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター）は、この変化の中で、戦争体験の「語り」の継承実践を取り上げている。

（5）明治大学では駿台史学会編集・発行の『駿台史学』一四一号、二〇一一年三月、慶應義塾大学では三田史学会編集・発行の『史学』八〇巻二・三号、二〇一一年六月が特集を組んでいる。

また、登戸研究所については、山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』、二〇一一年、芙蓉書房出版、渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦科学者たちの戦争』、二〇一二年、吉川弘文館、などの専著が刊行されている。

（6）ここでは、戦争遺跡を通した戦争への認識がストレートに「平和」につながるものではないことに留意しておきたい。戦争遺跡を媒介としなくても平和について考えることは可能であり、したがって戦争遺跡への認識の深度が平和へのそれとパラレルに理解できるものではない以上、学内の戦争遺跡への関心が唯一の尺度ではない。

（7）『日本大学百年史』第三巻、一〇五頁～、二〇〇二年、日本大学。『東京農業大学百年史』、八一頁、一九九三年、東京農業大学。

（8）『名古屋大学五十年史』通史一、第二編第四章「戦時体制の崩壊と名古屋帝国大学」、一九九五年、名古屋大学。佃隆一郎「豊橋にあった、陸軍教導学校と予備士官学校―愛知大学の「施設面での〝前身〟」として―」『愛知大学史研究』第三号、二〇〇九年一〇月、愛知大学東亜同文書院大学記念センター。

（9）このような事例は高等教育機関に限られるものではない。後述するように、現在は学校法人南山学園が経営する聖霊高等学校・中学校は、占領軍から使用を認められた旧陸軍野砲兵第三連隊兵舎を利用して始まった私塾が発展したものである（『南山学園史料集一名古屋聖霊学園史料集第一編』史料二・三・四、二〇〇六年、南山学園）。

（10）羽田貴史『戦後大学改革』Ⅰ「戦後大学改革と国土計画」、一九九九年、玉川大学出版部、初出は一九八八年九月・一二月。また、『金沢大学五十年史』通史編第一〇章「施設の整備」（二〇〇一年、金沢大学創立五〇周年記念事業後援会）によれば、内務省国土局による軍用施設転換方針が『北国毎日新聞』によって報道され、この報道が、北陸帝国大学―北陸総合大学という大学設置構想を企図してきた石川県および金沢市を刺激したことがわかる。ただし、当然ではあるが、総力戦体制下での人口分散と戦後のそれは、現象は同様であっても、目的・理由が異なることに注意が必要である。

（11）このことは、都市の形成・発展に関して学校設置が果たした役割が、戦後ふたたび見直され、都市の拠点に学校などの文教施設が再度位置付けられる可能性があったことを示している。今井信雄・前田至剛「軍都の空間から地方都市の形成へ―三重県と群馬県の事例より」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第二号、二〇一〇年三月。

（12）荒川章二『軍用地と都市・民衆』、二〇〇七年、山川出版社。

（13）大阪商科大学は、GHQ/SCAP に校舎を接収された（『大阪市立大学の一二五年』、七九頁、二〇〇七年、大阪市立大学）。また、神奈川大学の前身校である横浜専門学校も校舎を接収された（『神奈川大学 80 年のあゆみ』、二〇〇九年、神奈川

大学など）。

（14）これはテッサ・モーリス・スズキ「過去は死んでいない」『過去は死なない メディア・記憶・歴史』、二〇一四年、岩波書店［岩波現代文庫］、初版は二〇〇四年、における「過去への連累」という論点を意識したものである。

（15）この点を過大視すると、文教施設の設置を政治の結果としてのみ捉えることになる。それらの政治的駆け引きを分析することで社会の一側面が理解されることを否定しないが、それはハコモノ行政の政治力学の産物としてのみ文教施設を理解することになり、その呪縛の下では文教施設は徒花でしかないことになりかねない。

（16）武島良成「第一九旅団司令部と京都連隊区司令部の来歴―京都教育大学内の戦争遺跡をめぐって―」（『京都教育大学紀要』第一一七号、二〇一〇年九月、京都教育大学図書館）は、京都教育大学構内に残る旧第一九旅団司令部の建物を大学史中心の博物館にすることについて、「大学史と戦争遺跡の接合が強引」と評する。武島の説明による限り、京都教育大学の場合は個別の事情を勘案しなければならないのであろうが、大学史と戦争遺跡とは無関係ではなく、むしろ、一定の校地・校舎を必要とする大学であるがゆえに関係を持ってしまったものと理解する。ただし、本稿のような関心は、大学史とくに学校沿革史では希薄であるのか、例えば『野間教育研究所紀要第五三集　学校沿革史の研究 大学編一―テーマ別比較分析―』（二〇一三年、野間教育研究所）でも、大学と戦争との関わりは「戦時体制」として扱われるにとどまっている。

（17）戦争遺跡となる施設などが戦前・戦中期にどのように使用されていたのか、また、戦後、どのような状況に置かれていたのかを明らかにすべき学術的研究の蓄積は今後の課題である。武島良成の一連の研究は、このような関心から、勤務校の京都教育大学を対象に、戦争遺跡となる施設がどのように使用されていたかを、おもに文献史料によりながら解明しようとするものである。

（18）以下の論述は、永井英治「南山学園の戦争遺跡」『南山アーカイブズニュース』第七号、二〇一四年一一月、南山アーカイブズ、（以下、別稿と表記）を利用しているが、別稿は広報誌という掲載誌の性格を考慮し、註を省略し、事実の紹介を重視した。本稿はあらためて註を付し、戦争遺跡という視点からの叙述とするものである。

（19）一九四四年一二月六日付で、名古屋陸軍造幣廠会計課長と南山中学校長野山忠幹との間で、賃貸料月額六〇円で賃貸契約書が作成されている（『南山学園史料集 名古屋外国語専門学校史料集』、二〇〇五年、南山学園、史料29。

（20）この写真は、『南山アーカイブズニュース』第六号、二〇一三年一一月、南山学園史料委員会、九頁、などに紹介されている。

(21) 以下の記述は、『名古屋聖霊学園三十年史』、一九八一年、名古屋聖霊学園、に指摘されており、関係する基本資料は『南山学園史料集2 名古屋聖霊学園史料集』第一編、二〇〇六年、南山学園、に収録されている。

(22) 秋田は、日本に上陸した神言会が最初に活動の拠点とした地であった。

(23) 旧名古屋陸軍幼年学校蔵書としての側面を重視する場合は、南山大学図書館に所蔵されている旧陸軍幼年学校蔵書目録をみることによって、その一端を知ることは可能である。現在まで知られているところによれば、岩瀬文庫から名古屋外国語専門学校に移送するに当たって、児童書とみられる本は残し、大学図書館の蔵書たり得る本を選び出した結果が、南山大学図書館に所蔵される旧名古屋陸軍幼年学校蔵書である。したがって、現在知り得るのは、旧名古屋陸軍幼年学校蔵書の全貌ではない。なお、陸軍幼年学校での教育は中学校と同様の普通教育であったとされ（野邑理恵子『陸軍幼年学校体制の研究―エリート養成と軍事・教育・政治―』、二〇〇六年、吉川弘文館）、蔵書目録をみる限り、普通教育に即した内容となっている。

(24) 『南山大学五十年史』、二〇〇一年、南山大学。

(25) 『HOMINIS DIGNITATI　南山学園創立75周年記念誌』、二〇〇七年、南山学園、一五一頁に校舎計画移転図が掲載されている。

(26) 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス（http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do）。

(27) はっきりわかるのは、USA-R517-No1-85（一九四七年十一月七日撮影）である。以下、のちに南山大学名古屋キャンパスとなる区域を撮影した、米軍撮影の航空写真はすべてこの画像データによる。

(28) 『見晴台遺跡発掘調査報告書―近代編―』、一九九二年、名古屋市見晴台考古資料館。

(29) 伊藤淳史「H－1号窯付近で検出された爆弾穴と川名山高射砲陣地」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第一五号、二〇一三年三月、名古屋市見晴台考古資料館。

(30) 同じように、川名山陣地からも北側には直線状に爆弾穴を確認できるが、南には確認できない。

(31) アントニン・レーモンド著、三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド［新装版］』、二〇〇七年、鹿島出版会、初版刊行は一九七〇年。

(32) この写真は、『南山アーカイブズニュース』第七号、二〇一四年一一月、南山アーカイブズ、七頁に紹介されている。

(33) 坂井信三「建築家アントニン・レーモンドの見た「自然」―山里キャンパス建設をとおしてみたランドスケープ形成の民族誌的研究―」『アルケイア―記録・情報・歴史―』第七号、二〇一三年三月、南山大学史料室。

(34) 伊藤淳史「H－1号窯付近で検出された爆弾穴と川名山高

射砲陣地」（前掲）。

（35）一九六二年五月にレーモンド建築設計事務所によって作成されたプロットプランのうち、二枚が平面測量図の上に校舎等を配置している。南山大学施設課所蔵。

（36）現G棟が建設されている一九六三年五月七日撮影の航空写真（国土地理院地図・空中写真閲覧サービス MCB631-C5-12）では、校舎との位置関係から、このあたりと推測されるところに、黒く小さな点を確認できる。

（37）伊藤淳史「H－1号窯付近で検出された爆弾穴と川名山高射砲陣地」（前掲）。

（38）春日井の戦争を記録する会編『模擬原爆と春日井』、一九九五年、春日井の戦争を記録する会。奥住喜重・工藤洋三・桂哲夫『米軍資料 原爆投下報告書 パンプキンと広島・長崎』、一九九三年、東方出版。菊池良輝「日本に投下された49個の模擬原爆」『アジア文化研究所 研究年報』第四二号、二〇〇八年二月、東洋大学アジア文化研究所、同「PUMPKIN（模擬原爆）の投下を当時の日本の報道機関はどう報じたか」第一編・（二）『アジア文化研究所 研究年報』第四三号・四四号、二〇〇九年二月・二〇一〇年二月、東洋大学アジア文化研究所

（39）『新修名古屋市史』第六巻、二〇〇〇年、名古屋市、は通史編の一冊で敗戦までを扱っているが、本文でのパンプキン爆弾投下についての言及はなく、七月二六日の昭和区への爆撃が表の中に記されているのみである。

（40）国土地理院地図・空中写真閲覧サービス MCB631-C5-12（前掲）など。

（41）『南山学園史料集5 アルベルト・ボルドと南山学園』、二〇一〇年、南山学園、史料66。

（42）一九四八年七月三一日「南山大学設置認可申請書」に、将来のキャンパス移転計画が明記されている。

（43）ここでいう想像力とは、自己が直接体験できない事態について、間接的な体験によって当事者の痛みを我が身に起こったことのように捉え得る能力を想定している。これは、当事者の存在を忘れた無責任な想像ではない。

（44）ここでは、モニュメントの受容について注意を喚起した杉本淑彦「モニュメント研究の新地平」『史林』第九一巻第一号、二〇〇八年一月、史学研究会、記憶を想起させ継承させる記念碑・博物館・記念式典の「持続的活用」について論じた「サスティナブルな文化資源としての記憶？トルコにおける地震の記憶から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五六集、二〇一〇年三月、国立歴史民俗博物館、を挙げておく。これらの指摘から考えなければならないことは、記念碑のその後である。

Nanzan University and War-related Sites in its Campus

NAGAI Eiji

Abstract

In this paper, I consider war-related sites in school .

War-related sites do not exist by chance. The establishment of school, especially university needs building and considerably vast space and buildings. The military facilities which had become useless after Asian-Pacific War were conveniently diverted to educational facilities. So we must recognize their historical significance.

We cannot see lost war-related sites. But we can understand them by utilizing the result of historical study of university. In this way, we can make clear that one issue of historical study of university is recognition on the relation between university and war. This action leads to peace education.

There remains an unnatural terrain which is assumed that bomb hole in present Nanzan University Nagoya campus. Drop point of pumpkin bomb in Nagoya is located in the school route of Nanzan University. We should think about the history of Nanzan University from the point of view of the region and the modern history. It is to think about the war from our own standpoint.